
つながらない運命

奏 歌音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つながらない運命

【Nコード】

N8317N

【作者名】

奏 歌音

【あらすじ】

主人公・マリナは新たな恋を求めて優しい恋人の下を去る――。
ひとつの恋の終焉の物語。

急げ、急げ。

風の声に耳を澄ませ、地を蹴り、高く飛びながら。

何者にも負けないように、走り続ける。

青空に追いつけるように。

君に再びめぐり合えるように。

・*・*・*・*

ねえ、大祐。

私が、あなたの前から姿を消すのは、もう、これで2回目なんだよね。

1回目は、2年前。私たちがまだ大学生だったとき。そして、2回目が今。

もう、24歳で、すっかり大人になった女が、家出するみたいにあなただの元を離れていくのは、なんだか、猫が家をこっそりと出て行く気持ちに似ています。

すぐ、気が咎めて、罪悪感があつて、それなのに、あなたの元を体は勝手に離れていく。

ごめんね、大祐。

あなたは優しい、とても優しい。

いくらでも甘えてくれていいって、あなたが言ってくれたときは、本当にうれしかった。

2年前、雨の中で私を追いかけてくれたね。

行かないでくれて、言ってくれたね。

大好きなんだって、私が必要なんだって、言ってくれたね。

はずかしがり屋のあなたが、そんな情熱的な言葉を、人目もはばからずに、何度も、何度も。

私のことを、痛いぐらい強く抱きしめて、言ってくれたね。

なのに、私は、またあなたを裏切る。

きつと、あなたを傷つける。すごく。

ねえ、大祐。

。。。。。。。。。

．．．．．

「はあ。。。。。」

長い手紙を書き終えた私は、小さなため息をついて、窓の外を見た。駅に近いこの高層マンションは、とてもきれいで、はじめてきたときは、田舎育ちの私は、本当にお姫様になった気分だった。彼にそう告げると、

『お気に召しましたか？姫。。。』

ふざけて、だけど、ドキツとするくらい真剣に、私の前にかしずき、左手を差し出してきた。

やだ、やめてよ、恥ずかしいじゃない。

私がそう言って、すぐにそのごっこ遊びは終了してしまったのだけ
れど。

ずっとここにいれば、いつまでも、彼にかしずかれて、宝物みたい
に大切にされて、幸せに暮らせていたのかもしれない。

そんな風に思いながら、しかし私は、荷物を持って、部屋を出た。
鍵を閉めて、ポストにそれを入れる。

これで、私は、もうここを家とは呼べない。

そうしてしまうと、私は、心のそこからほっとした。

改めて扉を見上げる。

『AOYAMA DAISUKE』

綺麗なプレート。

そこには恋人の名前がおしゃれな英字で書かれている。

『結婚したらマリナの名前もここに載せような。』

大祐は、私にそう言ってくれたけれど……。

彼一人の名前しかないそのプレートを見て、私は自分に言い聞かせ
る。

そう、ここは彼の家。

彼だけのものであって、自分のものなんかじゃない。ここは、私の
帰る場所じゃなかったのだ、と。

「さよなら……。」

その声は、いやに静かに、神聖なもののように、廊下に響いた。

・*・*・*

私の名前は、朝比奈マリナ（あさひな まりな）という。ハーフなので名前はカタカナである。

『へえ、おもしろいね。その名前、なんか似合ってるし、いいよ。』

大祐は、初めてあったとき、私にそう言った。

大祐は小柄だ。私より背は高いけれど、平均男性の身長よりは低い。だからなのだろうか、彼はよくこう口にしていた。

『マリナは、ちっちゃくて可愛い。』

優しい言葉だった。

私は、背が低いことをずっと気にしていたから、うれしかった。

とろとろな生活だったと思う。
とろとろ。

なんだか切なくて、けれど、いとしい言葉。

けれど、耐えられなくなった。

おしとやかにしているのは、もともと苦手だった。

『僕は、マリナのことを、ちゃんとわかっているつもりだ。』

ううん、大祐。

わかってないよ、全然。

私は、全然お上品じゃないし、本なんて大嫌い。

今までは猫かぶってたんだよ。

帰ってきたら後ろで上着を受け止めたり、それを何も言わずにハンガーにかけたりするの、苦痛だったって、理解してた？

お料理、作るの苦手で、ものすごくご飯に時間がかかってたって、理解してた？

昨日、久しぶりにベッドで抱き合って、これが最後だって思って脱いだこと、大祐はきちんと理解してた？

ごめんね、大祐。

私やっぱり、大祐には合わないみたい。

・*・*・*・*

電車に乗って、何度も乗りかえをして、私は故郷に帰ってきた。もう6年だ、ここに帰ってこなくなって。

6年。なんて長い時間だったのだろう。

私の人生の4分の1はこの土地を離れていたことになる。

そんなに長い時間が経過しても、この町はまったく変わっていない。眩しいような緑。

建物なんかほとんどない。地平線が見える。

鞆を下ろして深呼吸をした。

東京のそれとはまったく違う空気。

人の匂いがしない空気。

それを思いつきり吸い込む。6年間吸い続けてきた東京の空気を追い払うように。

・*・*・*・*

気がつけば走り出していた。

土の上を走るのでさえ久しぶりで、私は何度もしをとりれそうになった。滑って転んでしまいそうになる。長いスカートは走るのに邪魔以外の何者でもない。

私は大祐への手紙の最後の部分を思い出す。

ねえ、大祐。

こんな会話をしたことを覚えている？

『運命の人って、ほんとにいるのかなあ。』

『いるよ、きつと。僕にとっては、マリナがそうだよ。』

『じゃあ、もし私の運命の人が大祐じゃなかったら？』

『難しいことを聞くなあ。うーん、そうだね。僕は、マリナが一番大切なんだ。君がもし、ほかにそばにいたい人がいるのなら、僕はおとなしく身を引くよ。』

大祐は運命を私にくれたのに、私は、あなたにそれを返すことができなかった。少しも。だけど、私は・・・。

『私は、恋をし続けるぞーっ!!』

そう、元気に、叫ぶ。

走ろう、どこまでも。

私の運命の人に出会えるまで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8317n/>

つながらない運命

2010年10月9日19時14分発行